平成３１年３月１１日（月）　東日本大震災追悼集会　校長講話

２年前の８月、私は、当時生徒会長だったＴ君と現生徒会長のＹ君と一緒に、長崎市立片淵中学校で開かれた平和集会に参加しました。私たちが長崎を訪問したのは、原爆という放射能の被害に苦しめられた街が、どのようにして復興したのかを学ぶとともに、平和について考える機会を改めて得たいと思ったからです。そして、長崎に行って学んだことが２つあります。一つは、長崎県内の学校では、原子爆弾が投下された８月９日を登校日にして、毎年平和集会を開いていることです。平和集会では、各学年の生徒が平和をテーマに様々な発表を行い、全校生で平和を願う気持ちを確かめ合っていました。二つめは、長崎出身のミュージシャンである福山雅治さんが作った「クスノキ」という曲を、長崎県民全員で歌っていることです。

福山さんの曲のモデルとなったクスノキは、長崎市内にある山王神社の境内に、今も実在する木であります。このクスノキは、原爆を受けて幹の上部は折れ、また熱線で焼かれ、ガラスや石が幹の中に食い込みました。一時は葉も落ちてしまい枯木同然でしたが、短い時間で生き返り、樹としての勢いを盛り返しました。その姿は、原爆によって「７０年は草木も生えない」と言われた長崎に住む人々に、希望と勇気を与えました。このクスノキは、長崎にとって大切な木として、市の天然記念物に指定されています。また、このクスノキの二世が、苗として運ばれ、国内外の平和を願う街に植えられてきました。つまりクスノキは平和の樹であり、平和のメッセンジャーでもあるのです。それでは、福山雅治さんの作った「クスノキ」を聞いてください。

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から８年が経ちました。今、福島では、時が止まっていた校舎に子どもたちの歓声が戻り、国内外から大勢の方が観光に訪れています。一方で、未だ避難指示が続く地域もあり、現在も４万人を超える県民が避難生活を続けています。さらには、根深く残る風評被害と、廃炉への長い道のりの中でも、震災の記憶が風化していく虞があります。長崎の人たちが「クスノキ」をみんなで歌い続けることによって、平和や命の尊さを語り継いでいるように、私たち福島県民も、震災や原発事故を風化させることなく、時間の経過とともに多様化・複雑化する新たな課題に果敢なチャレンジを続け、これからも多くの壁を乗り越えていかなければなりません。

まもなく、新しい時代の幕開けを迎えます。長崎県民に学びつつも、私たち福島県民は、「こんな経験をしているのは世界で福島だけ。立ち上がった福島を見せる。」という逞しさを身に付けたいものです。そして、福島プライド、都路プライドを胸に刻み、人と人、心と心のつながりを大切にしながら、稼げる大人になって、「生まれて良かった、住んで良かった、来て良かった」と思える、希望に満ちた豊かな故郷の未来を切り拓いていきましょう。